

近代日本の植民地防災に関する史料情報プロジェクト

プロジェクト代表者：文学部・教授 山崎 有恒

共同研究者：奈良 勝司

【研究目的】

本研究は、「本国でのすべての経験は植民地に還元される」（『インドの大地と水』より）という視点から、明治維新时期以来の近代化と西欧化の中で試行錯誤されてきた防災思想・システム・技術のいわば結論部分を浮かび上がらせることを目的とし、そのための基礎作業として、まず植民地防災に関する史料群が、日本国内外のどのような史資料館、図書館に、どのような形で所蔵されているのかという「史料情報」を、国内外の研究者の協力連携の元に集積し、それを「近代日本植民地史料情報データベース」という形にまとめて国内外に向けて発信することを当面の目標としている。また植民地史料に詳しい専門家を招へいしての研究会「植民地史料情報の会」を随時開催し、さらにメンバーによる合同史料調査をはじめとし、日本国内外での出張調査を繰り返し、上記ホームページの内容を充実させて行くことを目的としている。

【本年度の研究成果】

本年度の研究活動については、おおむね当初の予定通り進んだ。①「史料情報の収集」については、研究代表者山崎有恒、分担者奈良勝司、専門研究員島田大輔の三名を中心に精力的に展開した。特に東京方面の史資料館については、衣笠総合研究機構専門研究員に採用された吉田武弘、大学院博士課程在学中の伊故海貴則氏、十河和貴氏を中心に網羅的な調査をかけ、ほぼその全容が明らかになりつつある。また海外史料情報については、元本プロジェクト専門研究員であり、現在は韓国釜山市の東義大学校で助教授をつとめる藤野真拳氏、同じく協力者である台湾国立政治大学助教の陳家豪氏、高麗大学校亜細亜問題研究所教授イビョンシク氏らの努力により、海外史料情報についても着々と収集が進みつつある。本報告書執筆時にはまだ実施しえていないが、2019年度3月には台湾において合同史料調査を実施予定である。②「史料情報の会」については、前年度に引き続き順調に開催されている。今後2月25日には陳家豪氏、三月には浅野豊美氏（早稲田大学）の招聘が決定している。③院生たちを集めて開催している「植民地史料研究会」では今年も定期的に研究会を開き、朝鮮総督齋藤実に宛てた京城日報記者山崎猛の書簡群を順調に読み解いている（今年度5回以上開催）。

この間若手育成も確かな成果を上げつつある。専門研究員島田大輔氏は、これまでの研究成果を発展させて博士号（早稲田大学）を取得し、本年度は専門研究員へと格上げになった。こうした活躍が評されて、2019年4月は早稲田大学に特別講師として採用されている。また副代表の奈良勝司は2冊目の単著をまとめ、代表者の山崎も、多くの市民大学、市民講座などで災害史の講演を繰り返した。ちなみに本年2月26日には多くのメディアの前でセミナー開催が決まっている。大学院博士課程後期課程在学中のメンバーも、十河氏が昨年日本学術振興会特別研究員に採用されたのに続き、本年度はもう一人の院生伊故海氏も採用され、さらに来年度博士課程後期課程に進学予定の田中氏も採用されるなど、若手がどんどん力をつけてきている。

【今後の研究計画・予定】

本プロジェクトは、2018 年度で当初予定していた 3 年間の計画をすべて終了し、今後はその成果の取りまとめと発信に集中する。具体的には「史料情報」を 300 本以上に増加させてホームページにアップする、ホームページの多言語化を実施するなどであるが、それと共に「史料情報の会」「植民地史料研究会」については次年度も継続して開催していきたい。そして協力者のネットワークをさらにさらに拡大させ、プロジェクト成果のさらなる充実に努めたい。
（*なお本年は相手方との調整が諸般の事情により遅延し、年度末に韓国で開催予定だったシンポジウムが不成立となった。これについては 2019 年度内の然るべきところで、再度取り組みたいと考えている）